

2020年 / 月 31日

「わたしたちは となかいです。 えんちようせんせいと一と、一にふれぜんとを とどけにきました」と、年長の女の子がふりりでゆゆの部屋にやってきました。

手には何も持っていないませんが、それぞれの小さなふたつの手の平の間にある目には見えないプレゼントを、うれしく受け取りました。

書類に向かっている夕方の訪問で、肩の凝りや疲れが すーっと抜けていくような深呼吸の時間も同時に届けてくれたみたいです。

誰かと誰かのコミュニケーションが、あたたかき人間味のあるやりとりであるなら、社会は そこから明るくのとどかになり、そして何かを育んだり痛したりする空気がふくらんでいくに違いありません。

人々との間に前向きな橋をかける働きは、ユモアの感覚であり、夢を共に見る心…などのような「いのち」と結びついた力から生まれてくる気がします。

もちろん世界を見つめ、捉えるための透徹した目意識を前提にしつつも誰かに向ける表現・世界に向ける表現は、共感から生じるべきなのではないかと思えます。

子どもたちが「大きくなった発表会」の劇あそびに向けて、自分のお気に入りの役になって ひんぴんひんぴんといたり、うきうき走っていたり、しっぽや耳をよるこんでいます。

特別でない毎日の、いつもいつもの時間にも、子どもたちはトカイヤ何かに変身していたり誰かの真似をしたりして生きています。

ぶっこあそびを存分にたのしめる そんな魂が、人と人ときあたたかきつながり、むすびをつくるレトリックへと きつとつながっていくのでしょ！ 瑞々しい幼な子の心を保ち続けることで、よりゆたかを日々の生活と人間関係をつむぎ出すことができるように思います。

それは同時に一人の人間の内側のことにも言えることで、「考えることと行動すること」「感じることと判断すること」「思いと意志」……と、自分自身の様々な、そして必ずしも首尾一貫していない心の働きにいくらかでも結びをつけて、納得のいく人生を進めていくときの 銭も、その辺にある気がします。

子どもたちの 夢見るような表現をよろこびの中で受けとめながら、私たち大人も、少しへんてこでも、わくわくとレトリックをたのしみながら マジシャンとして 今日も過ごしていきたいと思います。

園長 升光 泰雄